

そうこうしているうちに、真つ暗な台所の隅すみの方で、異様な泣き声が聞こえてきたのだ。

それは、泣き声というよりも注1きいてえな声だったのだ。

ますます気味が悪く体が固かたくなったのだ。

旅人は、奥の方を見ねえようにして、そのきてえな声も聞かぬえようにして囲炉裏いろりの火を燃やしなから、震ふるえる体を暖あためようとしていたのだ。

そのうち囲炉裏いろり端はたのかぎ殿かに掛かかっている鉄瓶てつびんの湯が煮だつてきたのだ。

その鉄瓶てつびんの中を、目をこらして見てみたら、何か異い様なものが「ポコー」と浮うき上がったたり、沈しずんだりしてただど。

旅人は、ますます気味が悪くなつて、おっかな

